

## 伝 統 の 一 断 面

主 将    杉   江                      栄

現在、最も大事なことは試行錯誤の現行を「歴史的」に認識することだと考える。……………

探検部活動の歴史を自らの内にどう位置づけるのか。それによって今後の活動へのベクトルが決まるに違いない。—— ということを「大学探検部17年の歩み」という一文に岡村隆氏が書かれている。私はまさにそのとおりでと思う。

我が部も今年で創部15年になる。この機会に過去の資料、特に報告書を中心にスライド、写真などを調べてみた。いざ通観してみると、私は驚き、落胆した。自分の足もとを見つめなおす必要を感じた。そのとき思ったことを書いてみることにする。

まず報告書についてであるが、これはまったくチャランポランとしか言いようがない。行動の時間経過のみに終っているものがある。たしかに探検活動は創造活動であるからその報告にある程度の科学性を持たせねばならない。しかしこれだけに終っては活動を総合的にとらえることは不可能になる。これではいけない。そしてまた、雑感、紀行文があまりにも多い。初めて合宿に参加し、大変感激したとか、ボッカが死ぬように苦しかったとか、紅葉に秋の気配を感じたとか。報告書はあらゆるものが総合されていなければならない。行動経過も探検理念も、仮説も、考察も。

またフィルム、ネガといったものは、報告書以上にお粗末である。これらの内容について言っているのではない。資料としての価値があるかということを行っているのである。撮影の日付は記さ

れていないし、データにいたっては皆目なしである。

また、写真、スライドの内容についてのチェックすらも付記されていない。

我々がほんとうに探検をみつめ計画を立て、技術を練磨し精一ぱいの活動をしたのならば（したいと欲するならば）報告ということをもっと重要に考えるべきではないか。

今も我々は海外にアマゾン、オーストラリア、国内では洞窟、山、海、川下り等まさに様々の活動を展開している。これらの活動は新たな歴史を記録し、伝統となるであろう。しかし我々は伝統だけでは活動ができ得ないのである。伝統には貫禄が必要なのだ。それ以上に実質が必要なのだ。活動を記録しそれを報告することは探検活動（サークルとしての探検活動）の重要なプロセスなのである。

このプロセスを充実していくことが伝統の貫禄となる。そこに実質が生まれるのだ。また、その利用は新しい活動の源泉となり、創造活動のもとになり得るのだ。                      （工学部3回生）

